

解剖訓蒙

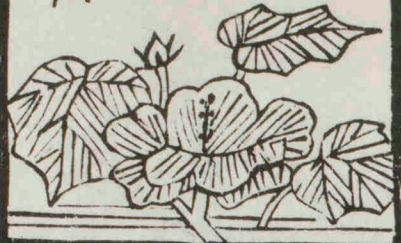
呼吸器論
泌尿器論

十三
十四



慶應義塾大學

醫學部
圖書室



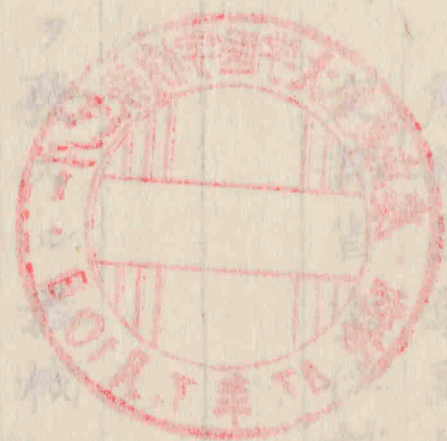
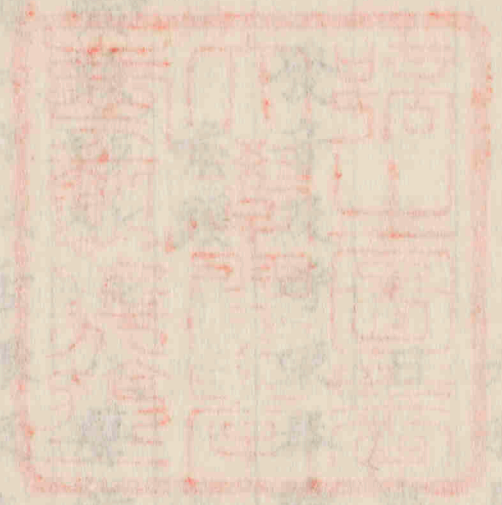
199

✕
k10-2

F 13
カ-22



解判別家卷之十五



藤文川士

3423

村治重厚

舌根及舌骨之下

至

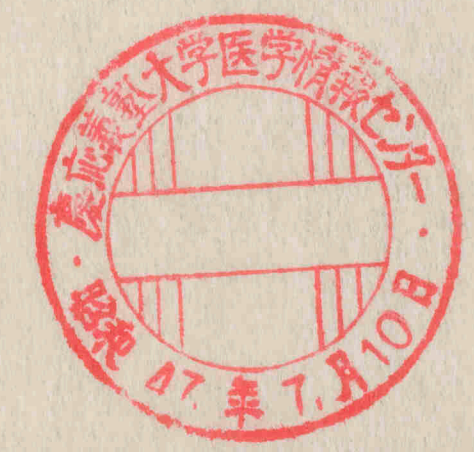
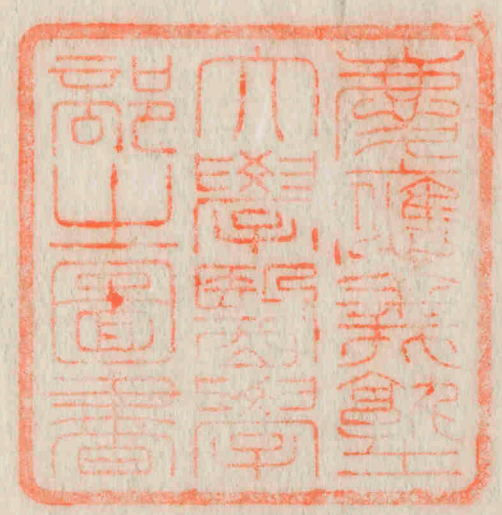
大

十



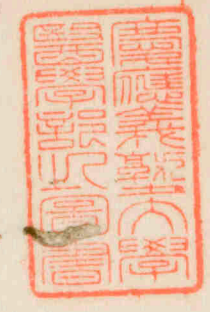
491.1
Ka-3
13

No. 2399
12 K 10-2



富士川文庫

2459



解剖訓蒙卷之十三

水利堅

解剖學教頭約瑟列第著

日本

文部省出仕村治重厚譯

發音及呼吸器論

喉頭

喉頭キラスハ、聲音ヲ發スル器械ニシテ、氣管ノ

頂ニ位シ、舌根及ヒ舌骨ノ下ニ在リ、此器、婚期ニ

至レハ整然ト發育シ、特ニ男子ニ於テハ、甚ク増

大シテ、頸部前面ノ中央ニ著シク突起ヲ呈ス、世

ニ所謂「アダム杏」是ナリ、後方ハ咽頭ニテ分界シ、

甲
パルス、プリマ、エス、ペ
テアルテリ

解剖訓蒙 卷之十三

上方ハ之ト交通シ、下方ハ氣管ニ開口ス構造
ハ韌帶ニテ維持スル軟骨ニシテ、筋ヲ附シ、血管
及ヒ神經ヲ具ヘ、粘膜ニテ裏包ス

喉頭軟骨

喉頭軟骨

カ、イ、ロ、イ、ジ、ド、カ、ハ、就中最大ニシテ、二個

骨、會厭軟骨、及ヒ披裂軟骨ヨリ構成ス、而テ甲ノ
三個ハ、兩側匹同ノ單片ニシテ、餘ハ對片ナリ、以
下之ヲ揭示ス

甲狀軟骨

カ、イ、ロ、イ、ジ、ド、カ、ハ、就中最大ニシテ、二個

翼狀板ヨリ形成シ、喉頭ノ上前部ニ在リ、其板

甲
ア、ダ、ム、モ、ル、シ、エ、
ヲ、ス

前方ハ、兩側ヨリ進テ相ヒ會合シ、後方ハ、互ニ離
去セリ、男子ニ在テハ、婚期後ニ至リ、其兩板會合
ノ位線、上部ニ於テ銳ク突出シ、下部ニ至ルニ從
ヒ漸次ニ退却シテ鈍圓ト為ル、婦人及ヒ幼童ニ
在テハ、突出微小ニシテ、上下平等ニ鈍圓ナリ
件ノ翼狀板ハ、方形ニシテ、斜傾セル内外面ト、圓
縁トヲ具ヘ、其外面ニハ、斜ナル起線ヲ有シテ、諸
筋ヲ附着シ、後隅ハ、上下共ニ、延展シ、鈍キ突起ニ
終ル、之ヲ角ホ、ス、ル、ト云フ、其上方ノ者ハ、下方ヨ
リモ長シ、上下ノ縁ハ、共ニS字狀ヲ呈シ、特ニ上

甲
コ、ル、ニ、ア

甲
カールトレンダリ
コイデユース

縁ニ於ハ尤モ著明ニシテ、左右會合スル處、即チ
全骨ノ正面ニ於テ、深截痕ヲ造為セリ
環狀軟骨クライコイド、カハ、其形狀恰モ封印指
環ノ如ク、前骨ノ下モニ占位シ、氣管ノ第一環ニ
連接ス、前方ハ細狹ニシテ、後方ニ至ルニ隨ヒ、漸
次ニ廣大ト為シ、下縁ハ地平ニ進行シテ、稍ヤ波
状ヲ為シ、上縁ハ前方ヨリ後方ニ登リ、項ニ至リ、
後部ニ於テ、一對ノ凸出セル橢圓突起ヲ有シ、披
裂軟骨ニ联接ス、
此軟骨ノ兩側ニ於テ、外方ニ稍ヤ隆起セル輪狀

甲
エビダロテックカ
チレジャー

ノ小面アリ、以テ前骨ノ下角ニ聯関シ、後面ニハ
幽微ナル縦起線アリ、之ヲ左右ニ分ク、是レ胃管
ノ附着スル處ニシテ、其各側ハ、淺潤ナル凹窩ナ
リ、後環裂筋、茲ニ填充ス、
會厭軟骨エチピグハ、粘膜ニテ被包セル纖維軟骨
板ニシテ、其形略ホ匙ノ如ク、喉頭孔ノ上ニ突出
シテ、嚥下ノ時ニ之ヲ蓋閉シ、尋常靜止スル時ハ
其位置斜ニシテ、舌骨ノ体後ニ在リ、其遊離端又
舌根ノ方ニ屈曲シ、其匙形ノ廣端ハ、遊離シ、狹端
ハ、展延シ、纖維彈力組織ノ一帯ニ由テ、甲狀軟骨

甲 カチレシ子スマアリ
テノイデス

ノ兩板會合セル上隅ニ附着シ其遊離縁ハ薄ク
シテ稍々翻轉シ前面即チ口腔ニ向ヘル方ハ凸
隆シ後面即チ喉頭孔ニ向ヘル方ハ凹陥セリ
披裂軟骨 アリテノイトカハ他骨ニ比スレハ細
小ニシテ環狀軟骨ノ頂上ニ於テ其後方ニ位シ
其形三稜柱ノ如ク三側面ヲ有シテ屈曲シ其基
礎ハ陥入シテ環狀軟骨ノ突起ト聯関シ尖端ハ
台方ニ曲リ ハ顆ノ軟骨ヲ戴キ軟帶ヲ以テ固定
シ後面ハ凹陥シテ披裂筋ヲ容ル前面ハ凸隆シ
テ甲裂筋ヲ附シ内面ハ他側骨ノ同面ト對向シ

乙 コルニキユリユム、ラ
リンキフ

甲 プロヒシエスマスキエテリス

乙 プロヒシエスマスカリク

丙 キエ子一ホムガ
チレシ

兩面ノ間截痕ヲ餘シ粘膜ニテ被包ス
右披裂軟骨基礎ノ三隅角中外角ハ環裂筋ヲ附
着シ前角ハ延展シテ聲膜ヲ附着ス
爰ニ屢披裂軟骨ノ上方ニ於テ 丙小軟骨アリ披裂
會厭皺襞中ニ達ス
喉頭ノ軟骨ハ會厭ヲ除クノ他皆チ真軟骨ニシ
テ軟骨膜ヲ以テ被包シ年齒ノ長スルニ隨ヒ甚
シク化骨スヘキ性ヲ具ヘリ若シ會厭軟骨ノ包
膜ヲ離レハ無數ノ不整ナル小窩ヲ顯ハシ宛モ
腐蝕スルカ如キ見望ヲ呈スベシ是レ細小ノ葡

甲 三ツルタイロハイ
イドリガメント

乙 ラテラレタイロハイ
ヲイドリガメント

丙 両方半トトリチ

菊状腺ヲ納ル處ナリ

喉頭關節及靱帶

甲狀舌骨膜タイロハイハ、稍ヤ弛キ纖維彈

力組織ニシテ甲狀軟骨ノ上縁ト舌骨ノ内面ヲ

繫定ス其正面ハ強厚且ツ尤モ緻密ナレモ側方

ハ菲薄ナリ

甲狀舌骨靱帶タイロハイハ、圓柱狀ノ纖維

彈力索ニシテ、甲狀軟骨ノ上角ト、舌骨大角ノ末

端トヲ繫定ス通常、其中部ニ於テ、丙顆ノ軟骨ヲ

含ミ、時有テ真骨ニ化スルコトアリ

環甲關節シリコタイロハイハ、喉頭ノ各側ニ

於テ、甲狀軟骨ノ下角ト、環狀軟骨ノ側部トノ間

ニ在テ、關節膜ニテ裝裏シ、囊靱帶ヲ以テ圍擁ス

此關節ハ、甲狀軟骨ノ下前方ノ運動ト、其反對運

動トヲ許容ス

環狀披裂關節シリコタイロハイハ、杵臼關

節ニシテ、喉頭ノ各側ニ於テ、披裂軟骨ノ凹面ト、

環狀軟骨ノ凸面トノ間ニ在リ、是レ亦々關節膜

ニテ裝裏シ、囊靱帶ヲ以テ圍擁ス此關節ハ、披裂

軟骨ノ各方ノ運動ヲ許容ス

甲
リカノシタ、タイロエ
ビダロテキユム

甲状會厭軟帶タイロエがメダトロハ、纖維彈力帶ニシテ會厭軟骨ノ狹端ヲ、甲状軟骨ノ會合隅角ノ上部ニ附着ス

乙
メダロテキユム

聲膜ウカールハ、彈力組織ヨリ造構シ、環状軟骨上縁ノ正面及ヒ側面ヨリ起リ、上方ニ進之、披裂軟骨ノ基礎及ヒ甲状軟骨ノ會合隅角ノ下部ニ達シ、其下部ハ、尤モ強勁ニシテ、喉頭ノ正面ヨリ窺ヘハ、環状軟骨ト、甲状軟骨ノ間ニ當リ、目視スヘシ、其側部ハ、菲薄ニシテ、甲状軟骨ノ側面トノ間ニ、甲裂筋アリテ、分隔セリ、其上縁ハ、稍々厚クシテ、甲状軟骨ノ會合隅角ト、披裂軟骨基礎ノ前角トノ間ニ涉ル、此上縁ノ位置ハ、喉頭室ノ下縁ト一致シ、大抵一般ニ聲帶ト稱シ、講明ス、但シ是ハ別種特異ノ器械ト為リ、存在スルニ非ス

甲
ミダロテキユム

クシテ、甲状軟骨ノ會合隅角ト、披裂軟骨基礎ノ前角トノ間ニ涉ル、此上縁ノ位置ハ、喉頭室ノ下縁ト一致シ、大抵一般ニ聲帶ト稱シ、講明ス、但シ是ハ別種特異ノ器械ト為リ、存在スルニ非ス

喉頭筋

喉頭ノ諸筋ハ、披裂筋ヲ除クノ他、皆十對筋ニシテ、其各側ニ位ス、以下之ヲ説明ス

乙
マスタリコタイ
ロイデユス

環甲筋クドリコタイハ、環状軟骨ノ正面及ヒ側面ヨリ起リ、外後方ニ上昇シ、甲状軟骨ノ下縁ニ附着ス、此筋ハ、甲状軟骨ヲ下前方ニ牽引ス、蓋シ

其運動ノ中心ハ、甲状軟骨ノ下角ト、環状軟骨ノ側面ニ於ケル關節ニシテ、成績ハ聲膜ヲ緊張スルニ在リ

甲 マスクル、ク、コ、アリ、テ、イ、デ、ユ、ス、ホ、ス、キ、キ、ス

後環裂筋 ホステリオル、マスキュラ、ハ、環状軟骨ノ 後方ニ於テ、其各側ノ廣潤窩ヨリ起リ、上外方ニ湊合シ、披裂軟骨基礎ノ外角ニ附着シ、此筋ハ披裂軟骨ヲ其基礎上ニテ、外後方ニ廻轉セシメ、以テ聲膜ヲ緊張シ、聲門ヲ廣ムルナリ

乙 マスクル、ク、コ、アリ、テ、イ、デ、ユ、ス、ホ、ス、キ、キ、ス

側環裂筋 ラテラール、ク、リ、コ、ア、ハ、前筋ヨリモ細 小ニシテ、甲状軟骨ノ側面ニ蔽ハレ、環状軟骨ノ

甲 マスクル、ク、コ、アリ、テ、イ、デ、ユ、ス、ホ、ス、キ、キ、ス

側方ニ於テ、其上縁ヨリ起リ、上後方ニ進シ、披裂軟骨基礎ノ外角ニ附着シ、此筋ハ、亦々披裂軟骨ヲ其基礎上ニテ、外前方ニ廻轉セシメ、以テ聲膜ヲ弛緩シ、聲門ヲ廣ムルナリ

甲裂筋 ク、リ、コ、ア、ハ、前筋ノ直上ニ位シ、甲 状軟骨ノ會合隅角ニ於テ、其内面ト及ヒ茲ニ隣接セ、以聲膜ノ一部トヨリ起リ、後方ニ進シ、披裂軟骨ノ外面、及ヒ基礎ニ附着シ、此筋ハ、披裂軟骨ヲ前方ニ牽引シ、以テ聲膜ヲ弛緩ス

乙 マスクル、ク、コ、アリ、テ、イ、デ、ユ、ス、ホ、ス、キ、キ、ス

披裂筋 ク、リ、コ、ア、ハ、前筋ノ直上ニ位シ、甲 状軟骨ノ會合隅角ニ於テ、其内面ト及ヒ茲ニ隣接セ、以聲膜ノ一部トヨリ起リ、後方ニ進シ、披裂軟骨ノ外面、及ヒ基礎ニ附着シ、此筋ハ、披裂軟骨ヲ前方ニ牽引シ、以テ聲膜ヲ弛緩ス

形成シ、披裂軟骨ノ後方ニ於ケル、凹陷中ニ填充
ス此筋ハ、披裂軟骨ヲ、相ヒ近逼セシメ、以テ聲門
ヲ狹隘ス

甲 マスクル、ダイロエ、ピ
グロツチジユース

以上較著ナル諸筋ノ他、茲ニ一二ノ菲薄ナル肉
束アレバ、是レ其関涉、配列ヲ確定セス、其或ル者
ハ、甲状軟骨ノ會合隅角ヨリ、分撒シ起リ、會厭軟
骨ノ兩側ニ達シ然ルニ或ル者ハ、會厭軟骨ヨリ
起リ、披裂軟骨ノ側面ニ至ル

乙 マスクル、アリテノエ、ピ
グロツチジユース

喉頭腔

喉頭ノ裏面ヲ被包セル粘膜ハ、咽頭及ヒ氣管ノ

甲 リガメンタ、グロツエ
ピグロチカ

乙 リガメンタ、エ、ピグロチ
テ、アリテノエ、テ

丙 シペリオル、エ、ベル、エ、
ル、ラ、セ、ラ、レン、キ、ス

粘膜ト連接ス此膜、舌根ト、會厭軟骨ノ間ニ於テ、

三個ノ舌會厭皺襞アロツク、ホ、エ、ピ、グヲ形成シ、又會

厭軟骨ノ兩側ヨリ、披裂軟骨ノ尖頂ニ翻轉シテ

披裂會厭皺襞アロツク、ホ、エ、ピ、グヲ形成ス而テ披

裂軟骨頂上ノ間ニ於ケル、截痕中ニ入り、其正面

ヨリ、喉頭腔ニ達シ、其後部ニ於テハ、咽頭腔ニ至

リ、胃管ノ初端ニ及フ

喉頭孔エ、ベル、エ、ル、キ、マ、ハ、三角形ニシテ斜傾

咽頭ト交通シ其基礎即チ廣部ノ上方ハ、會厭

軟骨ヨリ成リ、兩側ハ、披裂會厭皺襞ヨリ成リ、其

會厭軟骨、聲膜、及ヒ環狀軟骨内ニ在テハ、固着ス
レ、他部ニ於テハ、饒多ナル結締織ヲ以テ、其下
部ニ緩ルク附着ス而テ無數ノ小葡萄狀腺、及ヒ
顫毛柱狀内皮ヲ具有セリ
會厭軟骨ノ下部ト、舌根ノ際、茲ニ饒多ノ結締織、
彈力組織、脂肪組織ヲ沈着ス、又夕披裂軟骨正面
ノ粘膜下ニ於テ、同種ノ沈着物ト、許多ノ葡萄狀
腺アリ

喉頭ノ動脈ハ、上下ノ甲狀動脈ヨリ來リ、靜脈ハ、
甲狀靜脈ノ分枝ナリ、水脈ハ、頸腺ニ入り、神經ハ、

肺胃神經ノ喉頭枝ト、交感神經ヨリ分來セリ

呼吸器論

呼吸器ハ、氣管、胸腔、及ヒ附屬ノ筋ヨリ造為ハ筋
ハ、既ニ論セリ、今其他ノ者ヲ辨論ス

氣管

氣管^甲ニタラキ、又^乙ハ、圓柱狀ノ一管ニシテ、胃管

ノ前ニ在テ、頸ヲ下行シ、胸ニ達ス、乃チ第五ノ頸

椎ニ對シテ、喉頭ニ始リ、第三ノ背椎ニ對シテ、二

個ノ氣管枝ニ分レ、終^レ其丈々、畧ホ四「インチ」其

幅ハ一「インチ」四分ノ三、乃至一「インチ」アリ、但シ

甲 ブロンキア

婦人ハ、男子ヨリモ狭小ナリ、頸部ニ於テハ、各側ニ大血管アリテ、其間ニ挟マレ、胸部ニ於テハ、胸骨上部ノ直後ニアリ

乙 ブロンホデキスター

氣管枝 ブロンキア ハ、氣管ヨリ起リ、左右ノ二肺ニ開

丙 ブロンコス、シニスター

撒シ、心ノ基礎ヨリ發ル、大血管ノ後ニ在リ、右氣管枝 ライコス ハ、丈ケ、畧ホ一インチアリテ、第四ノ背椎ノ位線ニ當リ、殆ト直角ヲ為シテ、同側ノ肺根ニ進ミ、右肺動脈ノ後ニ在リ、左氣管枝 レフト、コス ハ、右ニ比スレハ、狭細ナレド、丈ケハ、畧ホ二倍アリテ、第五ノ背椎ノ位線ニ當リ、大動脈

アレンユリー、カーチレジ子

弓ノ下ヲ、下外方ニ過キ、同側ノ肺根ニ進ミ、左肺動脈ノ後ニ在リ

氣管及ヒ氣管枝ハ、軟骨環ノ疊續ニ成ル者ニシテ、纖維彈力膜ヲ以テ結締シ、内ハ、粘膜ニテ裏包

セリ、軟骨環 カチレ ハ、氣管及ヒ其分枝ヲ圍擁ス、但シ後方三分ノ一ハ、缺込セリ、其外面ハ、扁平

ニシ、内面ハ、凸隆ス、故ニ氣管内ニ在テハ、甚々突出セリ、夫ノ強勁ナル纖維彈力膜ハ、每環ノ隣接線ヲ結締シ、骨面ニ於テハ、薄ク展布セリ、後方

軟骨環ノ缺凸スル處ニハ、寛裕ノ纖維膜ト、横行セシ、白色ノ無紋筋纖維ノ内層トヲ以テ充填ス。氣管ノ軟骨環ノ最末ハ、其形變異シテ、兩氣管枝ノ第一環ニ準類ス、乃チ其下縁、正面ニ於テ延長シ、氣管ノ中點ニ至リ、後方ニ彎曲ス。粘膜ハ、帶白薔薇色ニシテ、平滑ナリ、然シ後方ノ膜樣部ニ於テハ、茲ニ著シク粘膜下彈力組織ヲ存シ、網狀ノ束ヲ造ルニ由リ微細ノ縦起線ヲ生セリ。内皮ハ、顫毛柱狀ニシテ、生活間ハ、其毛、上方ニ向テ顫動ス。

タラキ、心エント、ア
ロシキ、ルグ、ラシ

氣管及ヒ其枝ハ、無數ノ微細ナル葡萄狀腺ヲ具備シ、粘膜面ニ開口ス。其大ナル者ハ、後方ノ膜樣部ニ埋居シ、其管孔ハ、無數微細ニシテ、著シク粘膜面ニ針刺痕ノ如ク顯ハレ、看取スヘシ。其小ナル者ハ、軟骨環ノ中間ニ位シ、亦タ明亮ニ、其管孔ヲ粘膜面ニ呈セリ。動脈ハ、下甲狀動脈、及ヒ氣管枝動脈ヨリ來リ、靜脈ハ、甲狀靜脈、氣管枝靜脈ニ終リ、神經ハ、肺胃神經、交感神經ヨリ來レリ。

肺

甲。ヒユルモ子ス、又ニ
モ子ス

乙。シキス

肺^甲グロ^乙スハ、胸腔ノ各側ニ位シ、中間ニ、心臓及ヒ大
血管アリ之ヲ分テリ而テ其腔内ニ存スルハ、呼
吸作用ノ際、斷ヘス變換セル其容積ニ隨ヒ、之ヲ
充塞ス且ツ、其根蒂ヲ除クノ他、何處モ遊離シ附
着スル處ナク、都テ胸膜ヲ以テ密包セリ
根蒂^乙ト^ルハ、各肺ノ内側ニ於テ殆ト其中央ニア
リテ、氣管枝、肺動脈、及ヒ靜脈、氣管枝、血管、神經、水
脈ヨリ造為シ、胸膜ノ翻轉部ヲ以テ全包ス右肺
ノ根蒂ハ、上大靜脈ノ後方ニ在テ、奇靜脈、之ト吻
交セントスル時、其根蒂ノ上ヲ越テ左肺ノ根蒂

丙。ヒユルモ子ス

ハ、半ハ大動脈子ノ下、半ハ、其下行部ノ前ニ在リ
右肺ノ根蒂ニハ、氣管枝最上ニ位シ、次ニ肺動脈
在リ、肺靜脈ハ、最下ニ居ル左肺ノ根蒂ニハ、最上
ニ肺動脈アリ、氣管枝、其次ニ位シ、靜脈、之ニ順位
ス
肺根ニ於ケル凹窩、即チ肺門^甲ハ、ス^乙イニ入ラサル前
ニ、氣管枝再分ス、即チ各肺ノ葉數ニ應シ、右ハ、三
枝ニ分ル、左ハ、二枝ニ分ル血管モ亦夕肺中ニ入
ラサル前ニ分枝ス
肺ノ形狀ハ圓錐ニシテ、其廣濶ノ凹陷セル基礎

ハ、横隔上ニ坐シ、其圓光ハ、第一肋ノ位腺ヲ超ヘ
 頸部ニ達ス、其外面ハ、凸隆シ、其内面ハ、凹陷シテ、
 心臟ノ方ニ向ケリ、其後縁ハ、長且厚ニシテ凸隆
 シ、脊椎柱ノ傍ニ位ス、前縁ハ薄銳ニシテ、心ノ周
 圍ニ疊襲シ基礎ノ縁ハ、銳削ニシテ、其外方部ハ、
 横隔ノ起根ト、胸膛ノ下縁トノ間ニ於ケル、稜立
 ナル狹隙中ニ入ル、其外方部ハ、
 肺ノ重量、及ヒ容積ハ、年齢、兩性、軀幹ノ大小、健恙、
 動靜等ノ許多ノ事故ニ由リ、一定セズ、通例大人
 ニ於テハ、其重量、凡ノ二ポント半、容積、凡ノ三百

立方、インチトス、其丈徑ハ、尤モ大ニシテ、後部、殊
 ニ長シ、而テ右肺ハ、左ヨリモ短縮スレド、廣濶ニ
 シテ稍ヤ巨大ナリ
 各肺ハ、共ニ後方ニ於テ、尖頂ノ直下ヨリ分裂シ
 始メ、前方ニ斜行シテ、基礎ノ前部ニ及ビ右肺ハ、
 猶ホ他ニ第二裂アリテ、第一裂ヨリ起リ、前方ニ
 斜行シ、其前縁ニ至ル、故ニ右ハ三葉^甲、左ハ二
 葉ニ分ル、尤モ小ニシテ、下葉、尤モ大ナリ、左ハ、二
 葉ニ分ル、其下葉、尤モ大ナリ、左肺ハ、葉間ニ、正面
 ニ於テ、巨大ナル稜立セル截痕アリ、是レ生活間

胸壁ニ觸レ、心ノ悸動ヲ覺ユル部位ニ當ル
 肺ハ、嬰兒ノ片ハ、帯白薔薇色ナレ、成齡ノ長スル
 ニ随ヒ、灰白赤色、或ハ鉛色ニ變シ、帯藍黑色ノ點
 線ヲ以テ彩飾ス、此變色ハ、肺ノ組織中、漸次ニ黒
 色素ノ細粒ヲ沈着スルニ関ス、而テ肺ノ表面ハ、
 滑澤ニシ、光輝アリテ、滿面ニ、著シク富稜ノ外圍
 ヲ有セル物ヲ顯シ、以テ其構造ノ葉状ナルヲ示
 セリ
 肺ノ彈力ハ、甚ク勁クシテ、胸腔ヲ開ケハ、凋縮シ
 テ、凡ソ其前積ノ三分之一ニ至ル、而テ復々人功ヲ

ロビエリ

以テ、容易ク吹膨セシムヘシ、其質ハ、海綿様ニシ
 テ、水上ニ浮游シ、指間ニ於テ捻スレハ、一種ノ音
 ヲ發ス、未タ呼吸機ヲ始メサル前、即チ胎児ノ肺
 ハ、水ヨリモ重クシテ、其中ニ沈没ス、亦タ肺中、血
 積滲漏ヲ起シ、多少堅實スル疾病ニ於テハ、同一
 ノ形態ヲ顯ハス、健体ノ肺ヲ截取シ、之ヲ壓搾セ
 ハ、赤色ノ泡起セル液ヲ滲出ス、是レ血液及空氣
 ヲ混交セル粘液ナリ

肺ノ構造ハ、無數細小ノ富稜ナル第一小葉
 一、ロビエリ相聚テ同形ノ第二小葉
 一、ロビエリ相聚テ同形ノ第二小葉

甲
イントルロニユスコンシキ
クニクニツシキ

ヲ成ス肺ノ表面ニ富稜ナル物ヲ頭ハスハ是レ
其第二小葉ニシテ精密ニ検査スレハ亦々第一
小葉ノ外圍ヲ目視シ得ヘシ而テ各葉共ニ結締
織ヲ以テ繫約セリ弱年ニ於テハ此葉明亮ナレ
凡加年スルニ随ヒ漸ク不明トナル
第一葉ノ構造ハ全肺ノ造構ニ異ナラス小氣管
枝氣路ニ開口シテ氣胞ト交通セリ
氣胞セルヤハ呼吸ノ代空氣暢達セル極末ノ藏處
ニシテ富稜圓圍ノ囊ナリ其大小ハ同一ナラス
深部ニ在ル者ヨリモ表部ニ近キ者ハ巨大ナリ

乙
セルリユス又セルシキ
コニエレ

然レモ凡ソ一ライン十分一ノ直徑ヲ以テ中等
トス且ツ齡ノ老ルニ随ヒ増大シ又々喘息家ニ
於テハ甚々擴張シ胞間ニハ稍々分歧セル一個
ノ總氣路アリテ各胞ト交通シ小葉ノ出口ニ於
テ小氣管枝ニ連ル各胞ハ鱗狀内皮ヲ以テ裝裹
セル基礎膜ヨリ構造シ中間ニハ纖維彈力組織
アリ結定ス肺臟ノ彈力性ハ是レ之ニ歸シ其外
部ハ毛細血管ノ密網ニテ圍擁ス是レ肺動脈ノ
末枝ト肺靜脈ノ起端トノ中間ニ在ル者ナリ
小氣管枝セルハ二個ノ氣管枝肺中ニ入

甲
フロニキ

リ、吻合スルヲナク細分シ成ル者ニシテ、終ニ第一葉ニ止リ爰ニ於テ、氣胞間ノ氣路ニ通シ其構造ハ、氣管及ヒ氣管枝ノ如クナレバ、其軟骨C字狀ノ環ヲナサズ、數片ニ分レテ管圍ニ散布シ且ツ其筋纖維連續セル一層ヲ為セリ而テ每管分岐スル處ニ於テハ、其軟骨半月狀ヲ呈シ、以テ管口ヲ開濶セシムルノ布置ヲ取ル此管漸ク細小ト為ル片ハ、軟骨隨テ減少シ終ニ全ク喪ハシ唯筋纖維ヲ交ヘタル纖維彈力膜ト、裡面ノ粘膜トヨリ形成スルノミ

肺動脈 ピエールモナレ ハ、氣管枝ト伴行シ枝分シテ、氣胞周圍ノ毛細管網ニ終リ、心ヨリ黯赭ノ血液ヲ受ケ肺ニ輸送ス

肺靜脈 ピエールモナレ ハ、自上ノ毛細管網ヨリ始

リ小氣管枝ニ伴行シテ終ニ肺ヲ辞シ鮮紅含氣ノ血液ヲ心ニ輸ス

氣管枝動脈 アブロテンキリス ハ、前者ニ比スレハ細

小ニシテ大動脈ヨリ來リ小氣管枝ト伴行シテ、專ラ其組織ヲ營養ス

氣管枝靜脈 アブロテンキリス ハ、同名動脈ノ血液ヲ還

流シテ、右ハ、奇静脈ニ終リ、左ハ、上半奇静脈ニ終
ル
肺ノ水脈ハ、其數許多ナリ、表在ノ者ハ、其根蒂ニ
會湊シ、深在ノ者ハ、小氣管枝ニ伴行シ、共ニ氣管
ノ分岐、及氣管枝ノ周圍ニ、位セル水脈腺ニ入ル
弱年ニ於テハ、此腺ノ外望、他處ノ者ニ異ナラサ
レト、高年ニ至ルニ、隨ヒ肺ヨリモ暗黒色トナリ
且ツ屢々石灰様ノ沈着物ヲ含有ス
神經ハ、肺胃神經、及ヒ交感神經ヨリ來リ、前后ノ
肺叢ヲ造為ス、中ニ就テ、後叢ハ、巨大ニシテ、兩叢

共ニ氣管枝及ヒ肺血管ノ分枝ニ隨行ス

胸膜

胸膜
胸膜ハ胸腔ノ各側ヲ裝裏スル清膜ニシテ、

肺根ヨリ翻轉シ、其表面ヲ被覆シ、緊密ニ下組織

ニ固着ス、乃千其所在ニ從テ、肋骨胸膜

横隔胸膜
横隔胸膜ハ、肋骨胸膜ニ從テ、肋骨胸膜ニシテ、

ラウ肺胸膜
ラウ肺胸膜ハ、肋骨胸膜ニ從テ、肋骨胸膜ニシテ、

ヨリ一ノ皺襞ヲ作テ、下モ横隔ニ達ス、之ヲ肺韌

帶
帶ハ、肋骨胸膜ニ從テ、肋骨胸膜ニシテ、

ナル清液ニ浴シ、肺面ヲ滑利シテ、其呼吸間ノ運

解川

胸膜

胸膜

胸膜

アノアノム

動ヲ容易ナラシム
 胸腔ノ中線ニ於テ左右胸膜相近接シ
 縦隔ノ中間隙ハ心臟ノ占位セシ部分ト其前後ト其
 上方トニ關係シ前後上中縦隔腔ノ諸名アリ胸
 骨ノ中部ノ上方ニ於テハ左右ノ二膜少頃間相
 親接シ結締織ニテ結合ス
 前縦隔腔ス
 後縦隔腔ス
 胸膜ニテ分界シ結締組織ヲ充塞ス

乙 アンテリオルメシマス
チニユム

甲 ポステリオルメシマス
チニユム

乙 シュペリオルメシマス
チニユム

丙 ミッドルメシマスチニユム

丁 コロステイロイデユム

後縦隔腔 ポステリオルメシマス
 側ハ胸膜前ハ心嚢ニ由テ分界シ大動脈奇靜脈
 半奇靜脈胸管胃管肺胃神經大内臟神經ヲ含ム
 上縦隔腔 シュペリオルメシマス
 尖頂後ハ脊椎柱前ハ胸骨ニ由テ分界シ氣管ノ
 分岐胃管及ヒ心ノ基礎ニ聯ル大血管ヲ含ム
 中縦隔腔 ミッドルメシマス
 含容ス

甲狀腺

甲狀腺 タイロイデユム
 八、稍ヤ柔軟ナル赤色体ニシテ

解剖学
 卷之三
 一七

氣管ノ上端ノ前側部ヲ圍擁シ、喉頭ノ各側ニ達ス、其功用未タ知ルヘカラス、其構造ハ、一對ノ側葉ヨリ成リ、其下部ニ於テ横峽ス、イラニス、ウルクリ、之ヲ聯結ス、外面ハ凸隆シ、内面ハ凹陷シテ、結締織ヲ以テ氣管及ヒ喉頭ニ附着ス而テ胸舌骨、胸甲状、肩胛舌骨ノ三筋ニ蔽ハレ、後縁ハ、頸部ノ大血管ト關係セリ

側葉ラテラハ、長橢圓ニシテ、下部ハ、上部ヨリ

モ厚ク、尋常丈ケハ左右齊シカラス、然レモ、畧ホ

二インチ許ニシテ、氣管ノ第六軟骨環ヨリ、甲状

甲
レニユスラテラリア

軟骨ノ下部ニ達ス屢々横峽ヨリ一ノ突起ヲ生シ、上方ニ進ミ、舌骨ニ達シ、纖維帶ヲ以テ之ニ附着ス、間、此帶中筋纖維ヲ含メリ

腺ノ重量ハ、通例一乃至二グラムアリテ、婦人ニ

於テハ、男子ヨリモ巨大ナリ、此腺殊ニ婦人ニ於

テハ、腫大シ易ク、所謂甲状腺腫ナル疾病ヲ致ス

腺中ハ、脈管甚々富饒ニシテ、外部ハ、菲薄ナル纖維

膜ヲ被リ、内部ノ構造ハ、纖維組織ノ間隔アリ

テ、網狀ヲ為シ、其眼中ニ許多ノ微細ナル密閉胞

ヲ充填セリ、其胞ハ、有核セルノ一層ヨリ成立セ

甲
レニト、レ、グレ、ラ、ジ、ユ
ラ、タイ、ロ、イ、デア

乙
トニカ、プロ、リア

五
グ、ラ、ド、シ、クル、ス

コルピウス、プロブナ

ル、内皮ヲ以テ装裏シタル基礎膜ヨリ構造シ、琥珀色ノ粘稠液ヲ含メリ
動脈及ヒ靜脈ハ、上下甲狀動靜脈ノ枝末ナリ、水脈ハ、數多ニシテ、皆十頸腺ニ交通シ、神經ハ、肺胃神經及大交感神經ヨリ來レリ

胸腺

コルピウス、ダイミキユム

胸腺タイモス、ボテイイハ、暫時ノ器械ニシテ、其用亦夕知

ル可ラス、胎兒ノ時ヨリ、生後第二歳ニ至ルマテ其大サヲ増シ、此期ヲ過キレハ、萎縮シ長ビス、其位置ハ、胸骨後、前縦隔腔ノ上部ニ在テ、頸部ニ達

角言言蒙 卷之十三

コルピウス

シ屢々甲狀腺ニ及ス、其下ニハ、心囊、大動脈、左無名靜脈、及ヒ氣管アリ、其上ニ安置ス、其形ナハ扁平三角ニシテ、一對ノ不同ナル側葉ヨリ構造シ、淺紅色ニシテ、大小輕重ハ、年齒ニ随ヒ異ナル、人々差等アリ、但シ初生ニ於テハ、其寸々畧ホ二、三、四、五、六、七、八、九、十、於テ一、二、三、寸半、厚ハ二乃至三、ラ、重ハ九、十、羊、ヲ、シ、スト、ス、其外部ハ、菲薄ナル纖維膜ニテ被包シ、造構ハ、許多ノ壓平稜立セル小葉ヨリ成リ、結締織ヲ以テ

解剖外蒙 卷之十三 二七

甲
リサルダ
イルミ
タイモス

乙
セル
又
立
シ
名

取定シ、外見、恰モ葡萄状腺ニ似タリ、各側葉ハ通例其内ニ、大小一定セサル腔隙ヲ存シ、毎小葉内ハ、空竅ト交通ス、自上揭示スル、他、此腺ノ造構ハ、未タ確定セサルナリ、小葉ノ空竅ノ厚壁ハ、腺顆ニシ即チ粗大ノ顆粒ヨリ成リ、甲状腺、或ハ葡萄状腺ノ胞ニ比スヘシ腺顆ハ、遊離核、及コ有核セルヨリ造為シ、血管、其内ニ貫通ス、小葉ノ空竅及コ側葉ノ腔隙ハ、乳様ノ稠厚液ヲ充テ、許多ノ核及コ有核セルヲ混在セリ、
動脈ハ、内乳房動脈、心囊動脈、下甲状腺動脈ヨリ來

リ、靜脈ハ、左無各靜脈ニ通シ、水脈ハ、内乳房腺ニ終リ、神經ハ、肺胃神經、大交感神經ヨリ來レリ

解剖訓蒙卷之十三終
腎臓ハ二個ノ腺ニシテ、深ク腰部ニ占位
シ、脊椎柱ノ各側ニ在リテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高
ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高
ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高
ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高
ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高
ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高
ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高
ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高
ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高
ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高

解剖訓蒙卷之十四

米利堅 解剖學教頭約瑟列第著

日本 栖雲松村矩明 翻譯

泌尿器論

泌尿ノ器ハ、之ヲ泌別スル腎臓

ナル輸尿管トユレ其貯蓄器ナル膀胱

ナル尿道ニシテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高

腎臓

腎臓ハ二個ノ腺ニシテ、深ク腰部ニ占位

シ、脊椎柱ノ各側ニ在リテ、右ハ左ヨリモ稍ヤ高

甲子子ス

カ、フシユラ、エジホ

ク居ル其位置ハ正ニ腰椎ノ最初二個、或ハ三個
 卜、背椎ノ最末卜ニ對向シ、上方ハ互ニ近暱シテ、
 其ノ血管卜、尋常許多ノ脂肪ヲ含蓄セル、一塊ノ
 弛キ結締織卜ニ由テ爰ニ固定サル、其前面ハ、
 後面ヨリモ凸隆シ、上端ハ、下端ヨリモ巨大ニシ
 テ、副腎ヲ附着セリ、
 右腎ノ正面ハ、肝臟、十二指腸ノ下行部、及ヒ上行
 結腸ニ親接シ、左腎ノ正面ハ、脾、隣、胃、下行結腸ニ
 觸抵ス

腎ハ、滑澤黯赭色ノ扁平橢圓体ニシテ、内側ニ截

甲ポルタリニス

乙タニカ、プロプリス

間ヲ有ス、形狀極テ特異ニシテ類似スル者アレ
 ハ、通常腎形卜稱スルニ至ル其大小輕重ハ一定
 シナレバ、然シ長サ凡ソ四「イン」チ、廣サ二「イン」チ、
 厚サ一「イン」チ、重サ四「アン」ズヲ通例トス

彼ノ内側ノ截間ハ腎門ロハイト稱シ、血管、神經、排

泄管ノ出入スル處ニシテ腎竇ハサイトト交通ス

其外部ハ、都テ結締織及ヒ脂肪ヲ以テ被包スル

ノ池、亦々固有ノ纖維膜フコイブト被レリ此

膜ハ、纖維組織ヨリ成レル一層ニシテ、稍ヤ強固

且ツ菲薄ニシ、輕ク下部ノ腺質ニ附着シ、腎門ヨ

リ腎竇ニ入り其底ニ於テ血管及ヒ排泄管ノ包膜ト連續ス

其廣徑ニ隨ヒ之ヲ縱斷セハ、燦然ト二質ヨリ成

立スルヲ見レヘシ、即チ外方ノ顆粒状ニ見エル部ヲ、其所

在ニ係リ皮様質ニ配列シ、腎三稜体ニ包裏サレ、其尖頭ハ、腎乳頭ト稱シ腎竇内ニ突出ス

腎三稜体ハ、大小及ヒ負數一定セス、通常十個ヨ

甲 ソブステチキア、ユルカ
リス、ススキユロサ
乙 ソブステチキア、スジエ
ラリス
丙 ピラミツク、ゾヴマル
ピキ
丁 ハ、ピラー

リ十五個ニ至ル、且ツ時有時ハ二個湊合シ而テ

不整ナル三列ニ布置シ、其基礎ハ、各、外方ニ向キ、

尖頭ハ、各、腎竇ニ輻湊ス三稜体ハ、其基礎ヲ包裹

セル皮様質トヲ合セ、皆ナ是レ昔日胎児ノ時ニ

結締織ヲ以テ繫約セシ許多ノ分葉ニ當ル然レ

氏、後來着合シ分明ナラサルナリ數多ノ下等動物ニ於テハ、各葉著シク分斷シ、生涯殘留ス、且ツ屢々成長セル人ノ腎ニ於テモ、亦々其表面ニ昔時分葉ノ痕跡ヲ多少明亮ニ顯スアリ

腎質ハ、專ラ細尿管ス、細尿管ニ左口ト稱スル分泌

腎質ハ、專ラ細尿管ス、細尿管ニ左口ト稱スル分泌

管ト、血管ト、之ヲ束定セル分外僅少ノ結締織ヨ
リ構造ハ尿管ノ末端孔ハ、數百個アリテ、每乳頭
ノ頂ニ於テ見ルハ、此末孔ヨリ後ハ、二逐蹤シ
見ルニ、三稜体中ニ於テハ、尿管ノ進行、殆ト真直
ニシ、唯稍々披撒ス、且ツ屢々銳角ヲ以テ分枝シ、
其大サヲ減小ス、其基礎ニ近ク稍々枉屈シ、繼テ
最モ蜷曲シテ、終ニ皮樣質中ニ於テ囊狀ノ膨大
ニ止リ、腎球ヲ匿藏ス
尿管ノ直行ト蜷行ト、腎質ノ二様ニ分レ見ユル
ノ原由ニシテ、其壁膜ハ板狀内皮ヲ以テ裝裏セ

甲三葉スキユラマルヒキ

ル薄脆ナル基礎膜ヨリ成リ、囊端ニ至リ腎球上
ニ翻轉セリ
腎ハ、甚タ血管ニ富ミ、血液ヲ受クル處ノ動脈、此
器ニ比スレハ、分外巨大ニシテ、其門ニ近ク數枝
ニ分レ、再ヒ分枝シ、其實ニ入りテ、乳頭ノ間ヨリ
其質中ニ竄入ス而テ皮樣質中ニ至リ、猶細分シ、
終ニ最モ較著ナル脉叢ヲ作ル、之ヲ腎球甲ルリナロ一
メルト稱シ其形ハ球狀ニシテ、凡ツ一「インチ百
分一」ノ直徑ヲ有シ、密ニ錯綜蜷曲セル毛細管ヨ
リ成リ、尿管ノ囊狀膨大中ニ蘊藏サルハ、每球ヨ

リ血管再々外出シ、細尿管ノ進行ニ沿テ、互ニ吻合シ、其間ニ於テ毛細管網ヲ為ス、之ヨリ腎靜脉發ルシ、腎ノ外面ヲ循テ、三稜体ノ基礎ニ向ヒ輻湊シ、次ニ動脈ノ進行ヲ追慕シ、腎實ニ出テ終ニ一幹ト為テ腎ヲ去ル

甲
ハ
ス
リ
ナ
リ
ス

腎ノ排泄管、即チ尿管ハ、其門ニ於テハ、歴平セシ漏斗状ノ囊ノ如シ之ヲ腎盂腎盂ト稱ス其廣口、腎實内ニ於テハ二三部ニ分レ、亦タ此部細分シ數個ノ小漏斗ヲ為ス、之ヲ腎盞腎盞ト稱ス、每盞中ニハ、一個或ハ二個ノ乳頭突出スルヲ以テ

乙
イ
ン
タ
ン
シ
ビ
ユ
ラ

尿管口ヨリ滴瀝スルノ尿ハ、先ツ腎盞ニ受ク、腎盂ニ輸シ、之ヨリ尿管ヲ下行スルニ至ル

腎盞、腎盂、及尿管ハ、皆チ其構造同一ニシテ、外層ハ纖維膜、次層ハ、無紋筋膜、裡面ハ、粘膜ヨリ成ル、其纖維膜ハ、腎盞ニ在テハ、乳頭ノ基礎ニ於テ腎實ノ纖維包膜ト連續シ、筋膜ハ、腎盂ヨリ内方ニ至レハ、漸ク菲薄ト為リ、乳頭ノ基礎ニ於テ消失ス、然ルニ粘膜ハ、猶乳頭上ニ翻轉シ、尿管口ニ於テ其壁膜ニ聯結ス

腎盂ハ、其門實内ニテハ、血管ノ后位ニ在リ、腎靜

甲トクトスエリ子

脉ハ門前ニテハ同名動脉ノ前ニ位シ、竇内ニテ
 ハ二脉ノ枝極混雜ス神經ハ交感神經ノ腎囊ヨ
 リ來リ水脉ハ腰腺ト交通ス
 輸尿管トユルハ各腎ヨリ起ル圓柱狀ノ一管ニシ
 テ尿ヲ總貯器ナル膀胱ニ運輸スル者ナリ其長
 サハ十五乃至十八インチアリテ、鶯翅管大ノ直
 徑ヲ有シ斜ニ内方ニ下行シテ骨盤腔ニ入り前
 下方ニ屈曲シ膀胱底ニ至テ其内ニ開口ス其進
 行ノ間腹膜ヲ被ラス其後ニ在テ結締織ヲ以テ
 弛ク近部ニ附着シ前面ニハ精系血管アリテ交

又セリ初メハ大免筋ノ上ニ安位シ次ハ腸骨血
 管ト交叉シ其後ハ兩性ニ随ヒ腹膜ノ直腸膀胱
 皺襞或ハ直腸子宮皺襞中ニ包藏サルハ膀胱ノ
 近邊ニ來レハ男子ニテハ輸精管ノ外側ニ又接
 シ婦人ニテハ子宮頸ノ側傍ヲ沿行シ終ニ膀胱
 ノ壁膜ヲ斜ニ穿破シ尿道孔ヨリ後方ニ一イン
 チ半ヲ隔テ且ツ對側ノ者ヨリモ同距離ヲ隔テ
 開口ス
 纖維膜ハ強韌ニシテ其色帶白淺紅ニシ、筋膜ハ
 蒼白無紋ノ縱橫纖維ヨリ成リ下行スルニ随ヒ

稍々増厚シ粘膜ハ腺ヲ有セス、内皮ヲ具備ス、但シ其セルノ形狀大小ハ著シク異ナレリ、腎盂及ヒ輸尿管ノ動脈ハ、腎、精系、膀胱ノ諸動脈ヨリ分來セル細枝ニシテ、神經ハ、交感神經ヨリ來レリ

尿 イニラハ、腎ヨリ泌別シ、膀胱ニ潑蓄セル透明琥珀色ノ流体ニシテ、其化學成分ハ、甚々複雑ス、就中最モ確證タル成分ハ、尿素 ユリト稱シ、一種ノ有窒物ナリ

膀胱

早シカユリナリカ

膀胱 ユリナレハ、筋膜ノ囊ニシテ、其用ハ、腎ヨリ泌別セル尿ヲ貯蓄ス、其大小形狀ハ、膨脹或ハ萎縮ノ景況ニ随ヒ同一ナラズ、乃チ空虚ナルキ

ハ、扁平三角体ノ如ク、耻骨縫合ノ後ニ於テ其尖端ヲ上方ニ達シ、骨盤腔内ニ在リ、稍々膨脹スルキハ、圓形ヲ取り、尚ホ骨盤内ニ在リ、然レモ、十分テ下腹部ノ腹膜前腔ニ達ス、其最長ノ直徑ハ、此胸腔ヨリ下后方ニ達シ、肛門ニ向ク、然レモ、其頂ヨリ尿道ニ終ル末端マテノ中軸ハ、稍々屈曲セ

テ維持ス

直腸膀胱莢膜ハ耻骨ノ后方ヨリ攝護腺及ヒ膀胱

頭ニ行涉シ膀胱前鞅帶アンテリオリガマ

ト稱スル二個ノ小突起ヲ造ル又々之ト連續シ

肛門舉筋ヨリ底側ニ翻轉スル者ハ膀胱側鞅帶

ラテラールリガマヲ為セリ

膀胱ノ所謂假鞅帶ナル者ハ腹膜爰ニ翻轉シ造

レル皺襞ニシテ男子ニテハ直腸膀胱皺襞トレク

ホシクルト稱シ直腸ノ側面ヨリ膀胱ノ側面ニ涉

行シ婦人ニテハ之ヲ子宮膀胱皺襞ユテロウ

テラールリガマ

ト稱シ子宮ノ側面ヨリ膀胱ノ側面ニ至ル此皺

襞中ニハ輸尿管膀胱ノ血管及ヒ神經且ツ壅塞

セル臍動脈ノ初端ヲ包藏ス而テ此動脈トユラ

コスト伴行シ臍方ニ進ム氏亦夕小皺襞ヲ成セ

リ

腹膜ハ直腸或ハ子宮ヨリ膀胱ノ後部側部及ヒ

尖頭ニ翻轉シ次ニ骨盤ノ側方及ヒ腹腔ノ前壁

ニ至ル膀胱ノ腹膜ヲ被ラサル部ハ薄脆ナル織

維組織ノ一層ヲ以テ被覆ス是レ即チ直腸膀胱

莢膜ノ一部ニシテ腹膜下結締織ト連續セリ若

シ此器膨脹スルキハ其頂ヲ以テ下腹部ノ腹膜
 ヲ高ク舉上スルカ故ニ外科手術ニ當リ耻骨ヲ
 超ヘテ之ヲ刺スモ腹膜ヲ損傷スルノ虞ナキナ
 リ
 右腹膜及ヒ莖膜ノ次ニハ強剛シ筋膜マスキユ
 ト
 ヲ有ス其纖維ハ横紋ナク帯紅茶褐色ニシテ大
 小不同ニ集束シ網状ニ聯結シ乃チ内外二様ノ
 方向ヲ以テ配列セリ其外方ハ即チ縱纖維ニシ
 テ膀胱頸及ヒ其前鞴帶ヨリ披撒シ起リ再ヒ其
 頂ニ至リコラコラ附着ノ周圍ニ於テ輻湊ス其

マスキユロスス屏シ
 トル立シカ

内方ハ環状纖維ニシテ横行且ツ斜行シ其數前
 者ヨリモ少ナク而テ膀胱頸ニ於テ緻密ノ一束
 ニ集積シ膀胱括約筋立シクトルスヲ造為ス
 筋膜ノ次ニハ彈力纖維ヲ雜ヘタル纖維組織ノ
 一層ヲ具ヘ密ニ前膜ニ附着シ稍々厚ク強剛ニ
 シテ且ツ擴張スヘシ
 裡面ノ粘膜炎ニユコロ
 ンメハ帶白薔薇色ニシテ
 滑澤ニシ密ニ纖維層ニ附着ス其内皮ハ輸尿管
 及ヒ腎盂ノ者ト均シク數層ノセルヨリ成リ其
 深層ノ者ハ圓柱状ヲ為シ表層ノ者ハ巨大ニシ

テ敷磚状ヲ為ス、而テ頸部ニ於テハ、亦夕僅ノ小葡萄状腺ヲ具備セリ

粘膜ハ、膀胱空虚ナレハ皺縮シ、膨脹スレハ之ヲ展延ス時有テハ、粘膜上、筋膜ノ纖維束ノ配列ニ随

ヒ、網状ノ起腺ヲ顯ハス丁アリ、此状態ハ、尋常尿排泄ノ障礙ニ起因セシ、筋膜ノ異常作用ニ歸ス

膀胱ノ頸ヨリ底ニ涉リ、其内面ニ於テ、稍々隆起セル三角形ノ部位ヲ見ルヘシ之ヲ膀胱三角部

ト稱シ、圓キ細小ノ突起ニシテ膀胱ト尿道ト稱シ、其尖頂ハ膀胱懸壺垂ト稱ス、其尖頂ハ膀胱懸壺垂ト稱ス、其尖頂ハ膀胱懸壺垂ト稱ス、其尖頂ハ膀胱懸壺垂ト稱ス

トテトコム空カ

トテトコム空カ

トテトコム空カ

トテトコム空カ

トノ通孔中ニ突出ス、其基礎ノ兩隅ハ輸尿管孔ヲリテ、トリス、ヨリ成リ、斜ナル裂孔ニシテ、長サ一センチノ八分一ヲ有ス三角部ノ粘膜下筋組織ハ肥厚シ、屢々膀胱懸壺垂ヨリ、輸尿管孔ニ分涉セル筋束ヲ呈セリ

尿道

尿道スレハ、男子ニテハ、尿及精液ノ通路タリ、其解剖的ノ關係ハ陰莖ヲ講明スルノ后ニ、宜ク曉

解シ得ヘキカ故ニ、爰ニ其說辨ヲ掲ス、生殖器篇ニ讓ル

圓柱狀ノ物アリ、六層面ト直角ヲ為シ配列シテ、線狀ヲ顯ハセリ。顯微鏡ヲ以テ檢スルニ纖維膜ト連續セル纖維ノ間隔アリテ、其内ニ楕圓ノ貯器ヲ含ム、其長徑ハ皮樣層ノ表面ト直角ヲ為シ器内ニハ微細ナル顆粒物、核、脂肪球、及ヒ色素顆粒ヲ含蓄セリ。格爾里加爾氏ノ說ニ據レハ、此諸元質ハ皆十皮樣間隔中ノ貯器内ニ舎セル一簇ノセルノ宿物ナリトシ、其性甚タ破碎シ易ク、屢々其内ニ空窠ヲ目

随樣質
ソメジエラニスハ、黯赭色ノ琶爾布樣物ニ

視シ、尋常之ヲ偶然ノ破裂トシ、看做スルニ至レシ其構造ハ、微細ナル結締織ノ間隔ヨリ成リ、皮樣質ノ者ト連續シ、其眼中ニ、細小ノ顆粒物、色素顆粒、脂肪球、及ヒ神經中心ノセルニ稍ヤ類似シタル有核セルヲ含メリ

副腎ノ血管ハ、富饒ニシテ、副腎動脈、及ヒ近隣ノ橫隔動脈、腎動脈ノ枝極ヨリ來リ、其質中ニ入レハ、纖維間隔ヲ通過シ細分シテ、終ニ貯器ノ周圍ニ於テ毛細管ヲ造シ、副腎ヨリ謝出スル靜脈ハ、尋常一幹ニシテ、右ハ、下大靜脈ニ終リ、左ハ、同側

ノ腎静脈ニ終ル水脈ハ、甚々僅ナリ神經ハ、專ラ
 交感神經ノ太陽叢及ヒ腎叢ヨリ來リ、最モ饒多
 ナルヨリ、副腎ハ、神経系統ト関シ、緊要ノ作用ヲ
 ナス者ナラント、推考ヲ起セシニ至レリ、然ラス
 ニハ他ニ、此器ノ作用ハ、全ク知ル可ラス

解剖訓蒙卷之十四終

然神氣二終一水脈之甚也...
交感神經、太陽神經、脊索...
神經系統、開...
神經系統、開...
神經系統、開...
神經系統、開...
神經系統、開...
神經系統、開...
神經系統、開...
神經系統、開...
神經系統、開...

神經系統之作用

